

## 种晚菘的季节

北基行 訳

畑の大白菜（北京白菜）

## 遅まき白菜を蒔く季節

歴史上の偉大な愛国詩人——宋代の陸放翁に、『菘』という題の一首がある。その詩は次のとおりである。

「雨寒声を送り満背蓬たり、如今真に是 荷鋤の翁。憐れむべし事に遇して常に遲鈍たるを、九月区区として晚菘を種ゆ。」[雨風が背中に吹き付け蓬の花がみれじゃ、ついに鍬を担ぐ田舎翁になってしまった。憐れんで下さい、ぐずはなにをやっても事がはかどらん。植えそびれて、九月になって急ぎ黙黙と晚菘を植えることすわい。]

この一首は、陸放翁が晩年も田畠にてて体を動かしていたことを物語るもので、この精神には頭が下がるが、しかもこの詩は、いまの季節でも野菜の種を蒔くことが出来る教へくれている。今が、ちょうど陰暦の9月初旬で、陸放翁が晚菘を植えたのはこの時期である。北方の気候は南方より少し寒いけれど、霜の降る時節までにまだ二十日あまりあり、急いで菘を植えれば、発芽した苗は大きく育ち、霜枯れの心配はない。

ところで、陸放翁の植えた晚菘とは何でしょうか。それは、ほかでもない北京人がいう大白菜のことである。

今北京では、大白菜が店頭に山のように並ぶ。北京人は大白菜が大好きだ。だけど大白菜の原名まで知る人はいないだろう。新しく出版された『蔬菜栽培学』等の新刊本も、単に“北京白菜”、“中国白菜”的名称をつけて、十字花科の一種の蔬菜に属すると紹介するのみである。この紹介では完全とはいえない。

明代の李时珍が『本草綱目』中で紹介は、ほぼ完璧である。それによると、“菘は即ち今白菜と呼び為す者にして、二種あり。一種は莖圓厚にして微に青し。一種は莖扁薄にして、而して白し。其の葉みな淡青白色なり。燕、趙、遼陽、揚州の植める所の者は、最も肥大にして厚く、一本重き十余斤の者あり。南方の菘は、畦内に冬を越す。北方の者、多く窖内に入る。燕京の圃人、又馬糞を以て窖に入れ壅培し、風日に見（ア）たあらざれば、苗葉長出し、皆嫩黄色をなし、脆美にして無滓なり。”[菘とは、現在、白菜とよばれる野菜で、二種類ある。一種は、丸型で厚く薄青色である。もう一種は、扁平型をして、白色で、葉は淡青白色である。燕、趙、遼陽、揚州で植えられる白菜は、大きく育ち丸くボリューム感があり、一個の重さが五キロにもなる。南方の菘は、畑に植わったままで冬を過ごす。北方の菘は、取り入れて、窖という穴倉に入れる。北京の農夫は、窖に馬糞を入れ保温する。白菜は風や太陽にあたらないと、成長して、薄黄色の柔らかい葉っぱが長く伸びる。歯ごたえはサクサクとして、水分少なく美味しい。]

明代のもう一人の学者王圻は、『三才図会』の中で次のように述べている。“菘菜即ち白菜は、南北皆これ有り。蕪菁と相ひ類すれど、但し梗短にして、葉潤厚にして肥、味甘温にして、毒なし。主に腸胃を通利し、胸中の煩躁を除き、並びに酒渴を解く。”[菘菜即ち白菜は、中国の南、北どちらでも採れる。蕪菁（カブ）と同類であるが、茎が短く、葉は分厚く幅が広い。甘みがあり優しい味で、毒はない。胃腸によく便秘に効く。胸の渴きを取り、飲酒後の渴きを解く。]

歴来白菜について述べる詩文はまだまだあり、みな白菜を賛美している。例えば蘇東坡の詩は、大白菜の善いところを褒めたたえて次のように云った。“白菘は羔豚に類し、土を冒して熊蹯を出す。”[白菜は羊豚と同類で、土から熊の掌が出てきたようなものだ。] 大白菜があまりにも美味かったので、彼はそれをラムや豚、熊の掌に譬えた。氾成大的詩集のなかに『田園雜興』という絶句二首があり、その一首に云う、

“桑下の春蔬 緑は畦を満たし、菘心青嫩にして芥苔肥む。溪頭に洗拭し店頭に売る、日暮 塩に裏み酒を沽ひて帰る。”[桑畠の下の春野菜は、青青と畦が盛り上がっている。菘の心は青くて柔らかく、芥苔はよく肥えている。溪谷のそばで、白菜を洗って売っている。日暮にそれを買い、塩をまぶし、酒を買って帰る。（帰るころ白菜に塩がなじみ、これで一杯やりきる。）] もう一首はこのように云う。

“雪撥（ハ）ね挑（カカ）げ來たる塙地の菘、味は蜜蘿の如く更に肥濃なり。朱門内食の風味無し、只尋常に菜と作し把供す。”[雪を搔き分け、穴から掘り起こした白菜は、味は蜜づけレンコンのように濃厚だ。これに比べたら、朱門の成金が食う肉は、あじ無しに等しい。白菜はいつでも一品料理となって提供できるのだ。]

大白菜にたいするこれらの讃美は、どれも過分でないとおもうが、皆さん、ひとつ古人の説が正しいか試してはいかがか。

大白菜を菘と呼ぶのはなぜか。これにはまた一つの理屈があるので面白い。宋代の大学者陸佃の『埤雅』にあるのが、“菘の性は凌冬も彫せず、四時長（ツネ）に見る、松の操あり。故にその字会意にして、而して本草は交耐霜雪を為すを以て也。”[菘には大寒にあっても枯れない性格がある。春夏秋冬にあり、松に操あるのに似る。] これより、大白菜の性質が松に似ているので、松に草冠をくわえて命名したことがわかる。こう説明すると、この白菜の値打ちがもう一段上がったような気になる。大白菜のこの種の性格をさらに誇張して描写する書物もある。例えば明代の陶宗儀の『輟耕錄』は、元代末年に江南農民が一揆を起こした頃、揚州の大白菜が教えてくれた驚くべき頑強な生命力について、述べている。それによると、“揚州正に丙申、丁酉の間に至り、兵燹（セン）の余、城中屋址に遍く白菜生す。大なる者は重さ十五斤、小なる者も亦八、九斤を下らず。膂力有る人負う所才（ヤッ）と四、五窠のみ、亦異なる哉！”[丙申、丁酉の中間に時期に。揚州にまだ兵火の余燐が消えないころ、城の建屋の跡地に白菜が生えた。大きいのは一株十五斤（7.5kg）、小さいのでも8、9斤はくだらない。腕力ある人で、やっと4、5個が持てる重さだ。あれだけ大きい白菜が出来るのは不思議なことだ。] 当時揚州の大白菜は、生産量も最高であったようだが、この頃は、野菜栽培の経験などに気をくばる人が居らず、残念ながらその記録が残されていない。

現在、大白菜作りについては、北京郊区の農民が最も経験が豊富だろう。大白菜一株十五斤の記録があるかどうか、聞いていないが、あるかもしれない。陰暦九月の今、遅まきの白菜をひと畠植えることが出来るか迷っているひともいるだろうが、放翁が九月に晚菘を植えると云っているから、まず心配はいらないだろう。陸放翁の詩句はそれなりの根拠がある。今だ、現在が陰暦の九月初旬の天気で、北方でもまだ霜が降らないから、植えることが出来ないはずがなかろう。間に合うこと間違いないし、今もなお晚菘を植える季節なのだ。

園芸愛好者の皆さん、私と一緒に、小さな実験場を立ち上げませんか。それぞれが自分の家の前に、大白菜の種子を蒔き、霜が降る以前に白菜の発芽が間に合うよう頑張りましょう。この白菜が特大に成長しなくとも、相当量収穫できる可能性がある。このようにして経験を積めば、その利用価値がどんどん増えていくのだ。

## 【掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ】

## 「遅まき白菜を蒔く季節」 ひとそえ

前回は生姜でしたが、今回は白菜です。陸放翁（陸游）の「菘」から説き起こし、東坡肉（トンボ一口）を考案したとされる蘇東坡の詩を引用し、「羊豚、熊の手」に書かれてるほど美味しい白菜を賞賛しています。氾成大的「絶句」にある白菜に塩をまぶし、和んできたところで、煮にして一杯というのは、左党にはこたえられませんね。

白菜はピタミンC、ミネラルなどを含み、野菜の少ない冬にはなくてはならない食材です。塩をまぶして乳酸醸酵させた酸菜は、鍋やスープ、餃子の餡など中国家庭料理には欠かせません。また、揚州の大白

菜を例に、どんな場所でも大きな収穫が見込めることを述べています。

「私とおとことに、小さな実験場を立ち上げませんか」と、そこには必ず自分がいる。當時、大躍進の破綻で農業は壊滅的な打撃を受け、大量の餓死者がでました。これに対し、1960年11月に周恩来的指示により、

「糧食不足解決に向けて大躍進からの転換が動き始めました。農民が自由に耕作できる自留地や副業が認められました。さらに都市の人口を減らして農村に移住させ、都市での食糧消費を減らし、合わせて農業人口を確保する動きが出てきました。そして1962年1月から2月にかけて北京で「七千人大会」と言われる会議が開かれ、大躍進の誤りを最終的に総括したのです。

「自分の家の前に、大白菜の種子を蒔き」は、自留地を連想させます。人民公社に代表される集団化の弊害を除き、個人の生産意欲を高める市場主義の先駆けだったと思われます。毛沢東が書き返しを画策し、農業自由化、働きを許さない風潮が強かった時に、改革への援護を紙面で展開したのではないでしょうか。

ついでにもう一つ触れておきたいのが陸游です。北の金を追い払い、宋の国土を回復することを主張し続け、そのために反対派から睨まれ、左遷されて郷里で農業に携わっていたことから、農家や農民を題材にした詩も多いです。その陸游の作品をよく愛し、死ぬ間際まで翻訳を続けたのが、「貧乏物語」で知られるマルクス学者、河上肇です。河上の著作は早くから中国語に翻訳され、毛沢東、周恩来ら中国共産党指導者に影響を与えたと言われます。不思議な縁です。

現在、大白菜作りについては、北京郊区の農民が最も経験が豊富だろう。大白菜一株十五斤の記録があるかどうか、聞いていないが、あるかもしれない。陰暦九月の今、遅まきの白菜をひと畠植えることが出来るか迷っているひともいるだろうが、放翁が九月に晚菘を植えると云っているから、まず心配はいらないだろう。陸放翁の詩句はそれなりの根拠がある。今だ、現在が陰暦の九月初旬の天気で、北方でもまだ霜が降らないから、植えることが出来ないはずがなかろう。間に合うこと間違いないし、今もなお晚菘を植える季節なのだ。

園芸愛好者の皆さん、私と一緒に、小さな実験場を立ち上げませんか。それぞれが自分の家の前に、大白菜の種子を蒔き、霜が降る以前に白菜の発芽が間に合うよう頑張りましょう。この白菜が特大に成長しなくとも、相当量収穫できる可能性がある。このようにして経験を積めば、その利用価値がどんどん増えていくのだ。

## 【掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ】

## 「遅まき白菜を蒔く季節」 ひとそえ

前回は生姜でしたが、今回は白菜です。陸放翁（陸游）の「菘」から説き起こし、東坡肉（トンボ一口）を考案したとされる蘇東坡の詩を引用し、「羊豚、熊の手」に書かれてるほど美味しい白菜を賞賛しています。氾成大的「絶句」にある白菜に塩をまぶし、和んできたところで、煮にして一杯というのは、左党にはこたえられませんね。

白菜はピタミンC、ミネラルなどを含み、野菜の少ない冬にはなくてはならない食材です。塩をまぶして乳酸醸酵させた酸菜は、鍋やスープ、餃子の餡など中国家庭料理には欠かせません。また、揚州の大白

菜を例に、どんな場所でも大きな収穫が見込めることを述べています。

「私とおとことに、小さな実験場を立ち上げませんか」と、そこには必ず自分がいる。當時、大躍進の破綻で農業は壊滅的な打撃を受け、大量の餓死者がでました。これに対し、1960年11月に周恩来的指示により、

「糧食不足解決に向けて大躍進からの転換が動き始めました。農民が自由に耕作できる自留地や副業が認められました。さらに都市の人口を減らして農村に移住させ、都市での食糧消費を減らし、合わせて農業人口を確保する動きが出てきました。そして1962年1月から2月にかけて北京で「七千人大会」とと言われる会議が開かれ、大躍進の誤りを最終的に総括したのです。

「自分の家の前に、大白菜の種子を蒔き」は、自留地を連想させます。人民公社に代表される集団化の弊害を除き、個人の生産意欲を高める市場主義の先駆けだったと思われます。毛沢東が書き返しを画策し、農業自由化、働きを許さない風潮が強かった時に、改革への援護を紙面で展開したのではないでしょうか。

ついでにもう一つ触れておきたいのが陸游です。北の金を追い払い、宋の国土を回復することを主張し続け、そのために反対派から睨まれ、左遷されて郷里で農業に携わっていたことから、農家や農民を題材にした詩も多いです。その陸游の作品をよく愛し、死ぬ間際まで翻訳を続けたのが、「貧乏物語」で知られるマルクス学者、河上肇です。河上の著作は早くから中国語に翻訳され、毛沢東、周恩来ら中国共産党指導者に影響を与えたと言われます。不思議な縁です。

現在、大白菜作りについては、北京郊区の農民が最も経験が豊富だろう。大白菜一株十五斤の記録があるかどうか、聞いていないが、あるかもしれない。陰暦九月の今、遅まきの白菜をひと畠植えることが出来るか迷っているひともいるだろうが、放翁が九月に晚菘を植えると云っているから、まず心配はいらないだろう。陸放翁の詩句はそれなりの根拠がある。今だ、現在が陰暦の九月初旬の天気で、北方でもまだ霜が降らないから、植えることが出来ないはずがなかろう。間に合うこと間違いないし、今もなお晚菘を植える季節なのだ。

園芸愛好者の皆さん、私と一緒に、小さな実験場を立ち上げませんか。それぞれが自分の家の前に、大白菜の種子を蒔き、霜が降る以前に白菜の発芽が間に合うよう頑張りましょう。この白菜が特大に成長しなくとも、相当量収穫できる可能性がある。このようにして経験を積めば、その利用価値がどんどん増えていくのだ。

## 【掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ】

## 「遅まき白菜を蒔く季節」 ひとそえ

前回は生姜でしたが、今回は白菜です。陸放翁（陸游）の「菘」から説き起こし、東坡肉（トンボ一口）を考案したとされる蘇東坡の詩を引用し、「羊豚、熊の手」に書かれてるほど美味しい白菜を賞賛しています。氾成大的「絶句」にある白菜に塩をまぶし、和んできたところで、煮にして一杯というのは、左党にはこたえられませんね。

白菜はピタミンC、ミネラルなどを含み、野菜の少ない冬にはなくてはならない食材です。塩をまぶして乳酸醸酵させた酸菜は、鍋やスープ、餃子の餡など中国家庭料理には欠かせません。また、揚州の大白

菜を例に、どんな場所でも大きな収穫が見込めることを述べています。

「私とおとことに、小さな実験場を立ち上げませんか」と、そこには必ず自分がいる。當時、大躍進の破綻で農業は壊滅的な打撃を受け、大量の餓死者がでました。これに対し、1960年11月に周恩来的指示により、

「糧食不足解決に向けて大躍進からの転換が動き始めました。農民が自由に耕作できる自留地や副業が認められました。さらに都市の人口を減らして農村に移住させ、都市での食糧消費を減らし、合わせて農業人口を確保する動きが出てきました。そして1962年1月から2月にかけて北京で「七千人大会」とと言われる会議が開かれ、大躍進の誤りを最終的に総括したのです。

「自分の家の前に、大白菜の種子を蒔き」は、自留地を連想させます。人民公社に代表される集団化の弊害を除き、個人の生産意欲を高める市場主義の先駆けだったと思われます。毛沢東が書き返しを画策し、農業自由化、働きを許さない風潮が強かった時に、改革への援護を紙面で展開したのではないでしょうか。

ついでにもう一つ触れておきたいのが陸游です。北の金を追い払い、宋の国土を回復することを主張し続け、そのために反対派から睨まれ、左遷されて郷里で農業に携わっていたことから、農家や農民を題材にした詩も多いです。その陸游の作品をよく愛し、死ぬ間際まで翻訳を続けたのが、「貧乏物語」で知られるマルクス学者、河上肇です。河上の著作は早くから中国語に翻訳され、毛沢東、周恩来ら中国共産党指導者に影響を与えたと言われます。不思議な縁です。

現在、大白菜作りについては、北京郊区の農民が最も経験が豊富だろう。大白菜一株十五斤の記録があるかどうか、聞いていないが、あるかもしれない。陰暦九月の今、遅まきの白菜をひと畠植えることが出来るか迷っているひともいるだろうが、放翁が九月に晚菘を植えると云っているから、まず心配はいらないだろう。陸放翁の詩句はそれなりの根拠がある。今だ、現在が陰暦の九月初旬の天気で、北方でもまだ霜が降らないから、植えることが出来ないはずがなかろう。間に合うこと間違いないし、今もなお晚菘を植える季節なのだ。

園芸愛好者の皆さん、私と一緒に、小さな実験場を立ち上げませんか。それぞれが自分の家の前に、大白菜の種子を蒔き、霜が降る以前に白菜の発芽が間に合うよう頑張りましょう。この白菜が特大に成長しなくとも、相当量収穫できる可能性がある。このようにして経験を積めば、その利用価値がどんどん増えていくのだ。

## 【掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ】

## 「遅まき白菜を蒔く季節」 ひとそえ

前回は生姜でしたが、今回は白菜です。陸放翁（陸游）の「菘」から説き起こし、東坡肉（トンボ一口）を考案したとされる蘇東坡の詩を引用し、「羊豚、熊の手」に書かれてるほど美味しい白菜を賞賛しています。氾成大的「絶句」にある白菜に塩をまぶし、和んできたところで、煮にして一杯というのは、左党にはこたえられませんね。

白菜はピタミンC、ミネラルなどを含み、野菜の少ない冬にはなくてはならない食材です。塩をまぶして乳酸醸酵させた酸菜は、鍋やスープ、餃子の餡など中国家庭料理には欠かせません。また、揚州の大白

菜を例に、どんな場所でも大きな収穫が見込めることを述べています。

「私とおとことに、小さな実験場を立ち上げませんか」と、そこには必ず自分がいる。當時、大躍進の破綻で農業は壊滅的な打撃を受け、大量の餓死者がでました。これに対し、1960年11月に周恩来的指示により、

「糧食不足解決に向けて大躍進からの転換が動き始めました。農民が自由に耕作できる自留地や副業が認められました。さらに都市の人口を減らして農村に移住させ、都市での食糧消費を減らし、合わせて農業人口を確保する動きが出てきました。そして1962年1月から2月にかけて北京で「七千人大会」とと言われる会議が開かれ、大躍進の誤りを最終的に総括したのです。

「自分の家の前に、大白菜の種子を蒔き」は、自留地を連想させます。人民公社に代表される集団化の弊害を除き、個人の生産意欲を高める市場主義の先駆けだったと思われます。毛沢東が書き返しを画策し、農業自由化、働きを許さない風潮